

## 玉置 都華

### 略歴

2016年  
北海道大学 農学部 卒業

2016年9月~  
Wageningen University International Land and  
Water Management  
修士課程在籍

こんにちは、ワーゲニンゲン大学修士2年生の玉置都華です。留学生活も残り半年になってしまいました。前は留学を開始して約9か月が経過した時点で、ワーゲニンゲン大学への出願から合格まで、留学開始してから感じた大学の雰囲気、授業などについて書かせてもらいました。気づけば修論発表会も終わり、残すところはインターンシップのみになりました。時の流れは本当に早いものだと日々感じています。卒業後の進路をどうしようかそわそわ落ち着かない毎日です。

今回は、私の経験をもとに海外大学院（特にワーゲニンゲン大学）での修士論文研究の過程について紹介したいと思います。

### 海外大学院での修士論文研究について

修士論文執筆から発表までの流れは、大学によってはもちろんですが、プログラムによってもかなり違うため、あくまでもワーゲニンゲン大学の International land and water management に所属する私の例として参考にいただければ幸いです。

私の専攻は、1年生で授業を60単位、2年生で論文(36単位)とインターン(24単位)の合計120単位を取得すると卒業することができます。論文はほとんどの学生が半年またはそれ以上、インターンは最短4か月から長い人は半年以上かけるので、卒業の時期は学生によりけりとなります。最速なら1年10か月で卒業でき、支払い済みの授業料の返還を申

請できます。2年以上になる場合は授業料を追加で払う必要があります。非EU圏からの学生は、とにかく2年以内に卒業するよう頑張っている人が多く、EU圏の学生は授業料が非EU圏学生に比べてかなり安いので、時間をかけている学生が多い印象です。

論文とインターンをする順番は自由で、早い人は夏休みを返上し、1年生が終わったすぐの7月中旬から始めている同級生もいました。私の場合、夏は再試と、家族や友達が来る予定が分かっていたので9月~2月の半年で終わるように計画していました(結局7か月かかりました)。

以下に研究を始めてから修士論文執筆までの流れをまとめます。

研究スタートから論文執筆までの流れ	
5月	研究課題の決定、必修授業で研究手法を学ぶ
6-7月	サポーター、受け入れ先探し、指導教官と研究内容話し合い
8月中旬	修士論文契約書提出、受け入れ先との連絡、航空券の手配、出発準備
9月10日	出発
9月	研究計画書執筆、提出、フィールドワーク開始
10~12月	フィールドワーク、文献調査、指導教官への報告、インドネシアを楽しむ
1月~3月	ワーゲニンゲンへ戻り、データ分析、論文執筆、指導教官との話し合い
1月下旬	口頭発表会予約
3月上旬	要旨提出(発表会の10日前締め切り)
3月下旬	口頭発表会、論文提出

### 研究課題の決定(5月)



研究課題の探し方として以下のパターンが挙げられると思います。

1. 大学の教授陣が取り組んでいる研究に入れてもらう
2. 企業、NGO などの研究プロジェクトに入れてもらう
3. 自分で研究を組み立て、サポーターを探して実施する

これはプログラムによってかなり違うようです。私のプログラムは1~3どれでもできるようでした。

5 学期 (3 月下旬~5 月頭) に Research Approach という必修の授業があり、その授業で、研究課題の決め方、研究計画書の書き方、手法、分析手法などを学びました。この時点で、仮の研究課題を決めて、自分がどんな研究をしたいかということをはなごなんでも考えなければなりません。また、指導教官も研究課題の内容にあった先生に自分からアプローチして、指導をお願いする必要がありました。

私の専攻は International とついているだけあって、オランダ外でのフィールドワークが可能かつ推奨されています。1 年目の授業を通して水管理が問題になるのは途上国が多く、現地に行くことでわかる現状があることがあると思えました。そこで、泥炭地があり、友達から文化やご飯の話を聞いて興味を持っていたインドネシアを視野に入れ始めました。まさかオランダに来て、今度はインドネシアでフィールドワークをするとは思っていませんでしたが、他の国でのフィールドワークは良い経験になるだろうと考えインドネシアに行くための仮の研究計画書を書き始めました。

指導教官はワーゲニンゲン大学を知るきっかけになった先生にラブコールをして、担当してもらいました。その先生の論文を読んでいなかったらワーゲニンゲンには来ていなかったの、了承してもらってとてもうれしかったです。

#### サポーター、受け入れ先探し (6月-7月)

仮の研究計画書には、インドネシアの熱帯泥炭地における水管理の有用性というような内容で書き進めていたのですが、調べれば調べるほどすでにさまざまな研究が行われている領域であり、連絡を取った泥炭の専門の方々に自分のしようとしている研究内容はすでに行われている等厳しいことも言われ、かなり焦っていました。

その頃はすでに7月で、このままでは9月から修士論文が始められないのではないかとびくびくしていました。6月から7月にかけては最終学期で、スペインでの1か月間のフィールド授業をしており、グループワークで精神的にやられていたことも重なりかなりつらかったです。それでも、とにかく指導教官に相談したところ、南スマトラで水管理の研究を専門にしている先生を紹介していただけました。わらにもすがる思いでメールを送ったところ、9月から来て大丈夫だよと連絡があったのが7月中旬でした。そこから研究内容や現地でできることなどを話し合い、8月中旬に航空券を取り、9月10日にワーゲニンゲンを出発しました。ワーゲニンゲン大学内でする研究とは違い、別の国に行くためにはワーゲニンゲン大学外のサポーターが必要になることが多いので、早めにいるんな人にアプローチすることが大切のかなと思えました。

#### インドネシア出発まで (8月)

ワーゲニンゲン大学では修士論文の研究内容が決定したら、学生と指導教官で修士論文研究契約を記入し、大学に提出する必要があります。また、入学の際に研究費として1400ユーロを納めているのでその払い戻しの書類を提出する必要もありました。

条件を満たす学生は、ワクチンの接種や交通費の補助が支給されることもあります。研究計画書は現地に行かなければわからないことが多いことから、到着後に書き始めるようにワーゲニンゲン大学の指導教官に勧められました。ただ農地の水管理の研究ができること以外あまりわかっていなかったの、こんな状態で向かってよいのか不安な日々でした。

#### インドネシアでの日々 (9月-12月)



パレンバンに到着すると、大学の学生と国際担当の方が空港に迎えに来てくれました。初めての2週間は、大学の農学部長の先生や関係者の方々に挨拶したり、新学期のイベントに参加してキーボードを弾いたりしていました。指導教官と話しあって、どんなデータがとれるのか、どの文献を読めばよいのかアドバイスをいただき、9月は研究計画書を書いたり、新しくできた現地の友人にいろいろ連れまわしてもらっていました。

### 住居

スリウィジャヤ大学大学院が運営している、ゲスト用の Wisma ウィスマという宿泊施設に滞在していました。一人部屋で、机、ベット、テレビ台、洋服たんす、シャワー、トイレがついていました。エアコンもついていたので快適でした。ただ、窓が開けられなかったことと、外の騒音がはっきり聞こえたので、はじめは少しつらかったです。同じ時期に日本の大学院生と、パレンバンで学んでいるスーダン人4人が Wisma に住んでいたのも、ご飯を一緒に食べたり、言葉を教えあったり、パーティーをしたのは良い思い出です。

### フィールドワーク

研究には、日水位、時間水位、測量、土壌サンプル、インタビューのデータが必要だったので現地の学生、農家さんの協力の下でデータを集めました。フィールドは車で1時間半ほどかかる場所に位置していたので、滞在期間中は6回訪れ、データを集めました。そのうち2回は農家さんのお家に泊まらせてもらい、インドネシア料理を食べさせてもらったり、子供と遊んだりしました。

水位の測定はかなり原始的で、特に48時間連続で時間水位を測ったときは、毎時間ごとにバイクか徒歩で測定管の設置場所に向かい、手計りだったのでかなりしんどかったことを覚えています。一緒に測定してくれたインドネシア人学生はぴんぴんしていたのでとても助けられました。

インタビューは英語の質問票をグーグル翻訳で訳してインドネシア人学生に見てもらい、修正したものを持参して、農家のリーダーの方と農家の方10

人にインタビューをしました。インドネシア語が話せない私に、みなさんととても快く答えてもらえてありがたかったです。

フィールドワーク中にビデオを作ったのでよかったら見てください笑 ([こちら](#))

### 食べ物

インドネシアはストリートフード天国だったので、4か月の滞在中寮のキッチンで料理をしたのはたったの2回でした。それ以外は、近くのレストランや屋台で済ませていました。1食が200円くらいで十分おなか一杯になるのでありがたかったです。

おすすめのインドネシア料理は、ミーアヤム (Mie Ayam)、バソ (bakso)、マルタバ (Martabak)、ゴレンガン (Gorengang)、ナシゴレン (Nasi Goren)、サテ (Sate)、ソトアヤム (Soto Ayam)、ミーチョロー (Mie Chelor)、ナシパダン (Nasi Padang)、アヤムバツカール (Ayam Bakar)、イカンゴレン (Ikan Goren)、サトウキビジュース、アボカドジュース、ドリアンアイス、マンゴーなどなど数え切れません！特に、スマトラ島のパダン地域のパダン料理は辛いですが慣れるとすごくおいしかったです。手で混ぜて食べるナシ (ごはん) シリーズもとてもおいしいです。

よく衛生面のことを聞かれますが、2回ほど体調を崩した以外は全く平気でした。そのときはコンビニで売っている漢方薬のようなものを飲んで、水を飲んで、ひたすら寝ていました。基本的にはお店をちゃんと選べば大丈夫だと思います。また、水はボトル入り飲料を飲んでいました。空腹時に冷たいものや辛い物を食べることも避けたほうが良いです。

### インドネシア人の性格

とっても人懐っこくて、日本人だと伝えるだけでありがとう〜こんにちは〜と話しかけてくれたり、街中でも一緒に写真を取ろうと頼まれたり (たまに強引だなと思う時もありましたが笑)、かなりフレンドリーです。英語はなかなか通じないので、簡単なインドネシア語を覚えて話すと喜んでもらえました。一度、携帯の充電がなく路上で困っているとき、



目の前にいた方がまさかの充電器を貸してくれた時は本当にありがたかったです。ムスリムの女性はヒジャブを巻いていますが、いろんな柄や巻き方、ブローチと組み合わせていて見ていていつも楽しかったです。

### 交通手段

パレンバンは交通機関があまり発達しておらず、歩行者道も狭く、舗装されていないことが多いので、移動手段はだいたいバイクか車でした。友達のパイクの後ろに乗せてもらうか、GOJEK を使っていました。GOJEK は、アプリに現在地と目的地を入力すると数分で近くのドライバーが迎えに来てくれるタクシーサービスです。ちゃんとヘルメットとマスクを渡してくれ、初乗りは 60 円くらいだったので、とてもお世話になりました。GOJEK のサービスはバイクタクシー以外にも、ご飯をデリバリーしてくれる GOFOOD や、車を呼べる GoCAR などのサービスもあり今インドネシアでは流行っているようです。事前にお金をアプリにチャージすれば、キャッシュレスで利用でき、ポイントもたまります。チャージはコンビニか運転手さん経由でできます。

バイクに乗る機会が今までほとんどなかったのはじめは不思議な気分でしたが、渋滞の多い街中では、するする通り抜けられるバイクは快適でした。Trans Musi というバスに乗ることもあったのですが、並ぶ習慣のないインドネシア人学生といつも椅子取りゲーム状態で乗るまでが大変でした。調査地へは担当の先生と車で向かっていました。田舎のほうへ行くほど道路が舗装されていないことが印象的です。

### 旅行

ビザの更新のため一度インドネシアを出る必要があったので、11 月初旬にシンガポールに行きました。また、ジョクジャカルタとジャカルタにも行き北大時代に知り合った友人や、ワーゲニンゲン大学の同期に再会できたのもうれしかったです。

インドネシアの滞在最終週は、JICA と WetlandInternational、そして FAO のジャカルタオフィスを訪ねてもらい、実際に働いている方のお

話を聞かせてもらったのも良い経験になり進路を考えるうえで役に立ちました。

### ゴミ拾い活動

インドネシア滞在中、お向かいの日本人学生と一緒にゴミ拾い活動をしていました。パレンバンでは町中や道路のゴミが非常に目につき、ごみをごみ箱に捨てるということがあまり習慣化されていません。そこで Wisma の周辺や、市民公園でゴミ拾いをして少しでも意識の向上をしてもらえるように活動しました。現地の NGO と協力したり、大学の授業にお邪魔して学生にアイデアを共有したりする機会も得られたので、今夏に開催されるアジアゲームに向けて少しでもポイ捨ての現状が改善されればよいなと思います。

ゴミ拾い活動を facebook と Instagram で広めていました。今でも細々と情報を共有しているのでよかったらいいね！をお願いします！ ([こちら](#))

### ワーゲニンゲンに戻ってから (1 月)

熱帯気候から一変して冬のオランダはかなり違いました。どこかで帰るのを心待ちにしていた一方で、インドネシアのにぎやかな雰囲気と打って変わってオランダは静かで寒く、寂しい気持ちになったことを覚えています。帰ってきてからデータの分析を始めましたが、なかなかはかどらず、しばらく悶々としていました。このころからインターンシップも探し始め、応募も同時並行でしていたので、バランスが取れていなかったのかもしれませんが。そのような中でも、他の国へ行っていた同級生と思い出話や状況報告をしあったり、スタディアドバイザーと話したり、友人と料理をするなどしてなんとか気持ちを維持していました。

### 口頭発表会 (3 月)

Wageningen University では口頭発表会のことを Colloquium と呼び、修論評価の 5-10% を占めます。Colloquium は学生が希望する日を各自で予約するシステムとなっていて、北大で経験した、同じ専攻の学生が全員同じ日に発表会をするわけではありません。なので、同級生でも修論発表会を終える日にち





が違うことになります。また、発表会の 10 日前までに要旨を作成して専攻の秘書課にメールで送る必要があります。発表会と発表者の情報はメーリングリストで当日までに関係者に一斉送信されます。

発表会当日は、同級生のスペイン人と私の枠が 12:30 からスタートしました。指導教官はもちろん、修士一年生やほかの専攻の先生が 30 人ほど来ていました。服装は自由だったので、私はインドネシアの伝統衣装を着て臨みました。発表 15 分質疑応答 15 分で、とても緊張しましたが、終わった後に指導教官や友人から「ちゃんと一貫性があったよ！」と言われたときはとてもうれしかったです。

### ワーゲニンゲン大学での修士論文を通して

すべては自分次第、ということです。自主性しか求められなかった 7 ヶ月でした。指導教官によると思いますが、私の指導教官はワーゲニンゲンもインドネシアの先生も放任タイプで、もちろん質問をすれば相談に乗ってくれたのですが、自分で考えなければいけない時間が 9 割を占めていた気がします。常に自問自答し、初心に帰り、インドネシアで取れなかったデータを惜しむこともあり、研究の難しさや計画性の重要性を身にしみて感じました。わからなかったら聞く！助けを求める！というのも大事でした。

私は周りの影響を受けやすいので、特に 2 月から 3 月にかけて口頭発表会ラッシュが続き、友人がどんどん終えていくのに不安を掻き立てられました。ただ、あせりと比較は禁物だと、最後のほうでやっと気が付きました。とにかく毎日考えて、文献を読んで、友達と話して、最後の最後になって筋が完成して、なんとか乗り切れたという感じです。発表会を終えて、同級生と写真を撮って、ビールを飲んだときは非常に感動しました。

### ライティングについて

私はライティングにずっと苦手意識を持っているので、少しでも改善するためにしたことを紹介したいと思います。

ワーゲニンゲン大学では MOS モジュールというスキルアップのコースを 2 科目取ることが必須だっ

たので、そのうちの 1 つとして Scientific Writing を取りました。授業では、なぜ書くことが重要なのか、論文のレイアウト、書き方のルール、引用の仕方、シンプルに伝える方法、図表の挿入方法、ありがちなミスなどたくさんのことを学ぶことができました。このパワーポイントは何度も見返しています。

また、Grammarly という英文添削ツールの無料版（論文の仕上げには有料版を友人と共同購入して使いました）を使って、レポートを書くたびにスペルチェックや受動態の抽出などに役立てていました。ネイティブの友達に添削してもらい、自然な言い回しを学んだり、ウェブで公開されている使える言い回しや、他の人の論文からそのまま一文を真似してみたり、ライティングを伸ばすための本も読んだりしました。Mendeley は論文執筆のための文献管理に大変役に立ちました。ぜひ Desktop 版のダウンロードと Word へのプラグインをお勧めします。グーグルクロームを使っている方は Grammarly と Mendeley の拡張機能も併せて利用するのをおすすめします。

### 今後について

ワーゲニンゲン大学の学生としての生活も 4 か月を切りました。研究は終わったときの達成感はあるものの、自分には向いていないのではないかと思うようにもなり、今までやってきた農業環境分野は大好きでも、新たな世界に飛び込むのも面白いのかもしれないと考え始めました。現在はドイツの環境エンジニアコンサルタントで、泥炭地関連研究の手伝いをしています。ワーゲニンゲンに住んでないので、すでに学生じゃない気分になります泣

留学当初は、卒業後は国際機関で働きたいと漠然と思っていましたが、実際に国際機関でインターンや働いている方のお話を聞くと、働いている人の性格やバックグラウンドを聞いて、まだまだ実力や経験が足りないなと感じる日々です。今のところは次これやってみたいかも、面白そうかもという気持ちを大事にして次の行き先を決めていきたいと思っています。環境は大事ですが、結局は自分次第でどうにでもなるのかなと、インドネシアで学んだ気がします。



修士論文の過程では、たくさんの人に励ましてもらい、アドバイスをいただき、情報を共有していただきました。この寄稿文も少しでも誰かの役に立てば幸いです。

